

## 母マリアと出会った

牧師 山本 護

神の御子イエスの降誕に関して、ルカ福音書は母マリアを念入りに描き、マタイ福音書は父ヨセフの行動を詳しく語っています。天使との対話(ルカ1:34,38)や自らが発している讃歌(1:47~55)で、マリアの声は大きく聞こえて来ますが、ヨセフは八面六臂の活躍(マタイ2:13~15,19~23)の割にはひと言も発していない。少年イエスが好き勝手にふるまっていた時にも(ルカ2:42~46)、マリアだけがヒステリックに叱りつけ、ヨセフはその傍らで黙っていた(2:48)。そしてこの時以来、父ヨセフの姿は忽然と消えてしまいます。

もうすぐ待降節という風の強い日、卵を抱えてボロボロになっている母カマキリが寒さに耐えていました。顔を近づけてじっと見ると、母は首を曲げ、ふと目が合う。「おや、ヨセフはどこにいるのかね」と尋ねると、母はブイッと横をむいてしまった。こりゃいささか意地悪な質問だったか、ゴメンナサイ。

アイロニーある森鷗外の下手くそな句、「螻蛄の夫は妻に喰はれける」。それならばこちらも負けじと駄句ひとつ、「螻蛄よ御子を産むため何喰うた」。写生を心がけながらも、何やら寺山修司の演劇のようになってしまった。名人に詠んでもらうと、「螻蛄の武運拙き最後かな(会津八一)」。洞察深くまた実にさりりとしてうまいものです。

東方の学者は星に導かれて(マタイ2:9)、ひっそり生まれた神の御子を見つける。「家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられ



た(2:11)」。おや、ヨセフはどこにいるのかね。大丈夫、まだ消えていません(2:13)。イエスの降誕に際し、邪悪な権力(2:3)によってたくさんの幼子が犠牲になりました(2:16)。現象としては、卵からかえった子カマキリのほとんどが蜘蛛や蜥蜴に食べられてしまうことと似ていますが、ここに邪悪はありません。

腹をパンパンに膨らませていた母カマキリ、翌日に集会所の扉の上に移っていましたが、翌々日には見当たりませんでした。どこかに卵を産みつけたか、体力を失い朽ち果ててしまったか分かりませんが、来春には子カマキリがわらわらとあふれますように。そして待降節が近づく寒い日にまた、その年の母マリアと出会えますように。Ω